

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
統計熱力学	平成28年度	和田 憲幸	5	前期	学修単位 2	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>微視的世界(原子や分子)のエネルギーの知識を使って巨視的世界(物質)の性質を理解するために、統計学の概念を導入し、量子力学と熱力学を橋渡しする統計熱力学を学び理解する。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>すべて材料工学科 学習・教育目標 (B)〈基礎〉および JABEE 基準 1(2) (c)に対応している。</p> <p>第1週 ボルツマン分布, 分子のエネルギー</p> <p>第2, 3週 プランク分布, 黒体放射, レイリー・ジーンズ分布</p> <p>第4, 5週 固体の比熱 (金属および絶縁体の比熱)</p> <p>第6, 7週 アインシュタインの格子比熱モデル, デバイの格子比熱理論, フェルミ分布</p>	<p>第8週 中間試験</p> <p>第9週 マクスウェル・ボルツマン分布</p> <p>第10週 フェルミ・ディラック分布</p> <p>第11~15週 固体内の電子密度</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 統計熱力学の基礎となるボルツマン分布が理解できる。</p> <p>2. プランク分布とその応用 (黒体放射, 比熱) を理解することが</p>	<p>出来る。</p> <p>3. マクスウェル・ボルツマン分布およびフェルミ・ディラック分布と固体内の電子状態を理解することができる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>統計力学から見出される様々な分布から, 巨視的世界と微視的世界の概念を数式によって理解し, また, 量子力学と熱力学の関係が分かる専門知識を培う。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」1~3の確認を中間試験, 期末試験で行う。1~3に関する重みは同じである。合計点の60%の得点で, 目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項]</p> <p>数式の背景にある物理的意味を理解することが重要である。また, 本教科は後に学習する量子力学と強く関係した教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>微分・積分 (重積分を含む) 三角関数および指数関数に対する数学の知識と熱力学に対する基礎知識が必要である。本教科は材料熱力学, 物理化学 I の学習が基礎となる教科である。</p>	
<p>[自己学習]</p> <p>授業で保証する学習時間と, 予習・復習 (中間試験, 定期試験のための学習も含む) 及び適時与える演習問題のレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が, 45時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書: 「アトキンス物理化学(上)(下)」 P.W. Atkins 著, 千原秀昭, 中村亘男訳 (東京化学同人)</p> <p>参考書: 「大学講義シリーズ基礎電子物性工学」川辺, 平木, 岩見著, コロナ社, 「電気学会大学講座 電子物性基礎」電気学会</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>中間・期末の2回の試験(100点満点)の平均点を最終評価点とする。なお, 中間・期末試験の再試験は行われない。</p>	
<p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
反応速度論	平成28年度	小侯 香織	5	後期	学修単位 2	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>化学反応は石油化学, 医薬品など様々な物質を製造する工業プロセスで必須である. 本科目では, 反応速度論について学ぶことで, 種々の化学反応の解析の手法を身につけることを目的とする.</p>	
<p>[授業の内容] 全ての内容は, 学習・教育目標 (B) (専門) および JABEE 基準 1(2)の(d)(2)a)に対応する</p> <p>第1週 授業の概要説明</p> <p>第2週 反応速度の定義と反応次数</p> <p>第3週 積分系速度式と1次・2次反応の解析</p> <p>第4週 半減期と時定数</p> <p>第5週 平衡反応</p> <p>第6週 反応速度の温度依存性とアレニウスパラメーター</p> <p>第7週 衝突理論</p> <p>第8週 遷移状態理論</p>	<p>第9週 中間試験</p> <p>第10週 逐次反応 (1)</p> <p>第11週 逐次反応 (2)</p> <p>第12週 単分子気相反応</p> <p>第13週 連鎖反応, 爆発</p> <p>第14週 吸着と表面反応 (1)</p> <p>第15週 吸着と表面反応 (2)</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 反応速度の定義を理解し, 反応次数や速度式を求めることができる.</p> <p>2. 積分系速度式から反応次数を決定し速度定数を求めることができる.</p> <p>3. 正反応および逆反応の速度定数と平衡定数の関係が理解できる.</p> <p>4. 反応速度の温度依存性からアレニウスパラメーターを求めることができる.</p>	<p>5. 衝突理論および遷移状態理論の概要が理解できる.</p> <p>6. 逐次反応の解析ができる.</p> <p>7. 1分子反応のリンデマン-ヒンシェルウッド機構により気相1次反応の速度を説明できる.</p> <p>8. 連鎖反応の速度式の導出ができる.</p> <p>9. Langmuir 吸着式と吸着速度論を理解できる.</p> <p>10. L-H 機構と E-R 機構を区別できる.</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>講義および演習を通して反応速度論の概要を理解し, 種々の化学反応の解析ができる.</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>[この授業で習得する「知識・能力」] 1~10の習得の度合いを中間試験および期末試験により評価する. 各項目の重みは同じとする.</p>
<p>[注意事項] 計算演習を行うので電卓を持参すること.</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 基礎的な物理・化学の概念を理解していること.</p>	
<p>[自己学習]</p> <p>授業で保証する学習時間と, 予習・復習に必要な標準的な学習時間の総計が, 45 時間に相当する学習内容である.</p> <p>教科書: ノート講義</p> <p>参考書: P. Atkins, J. Paula 著 アトキンス物理化学 (東京化学同人) など</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>中間試験, 期末試験の平均点で評価する. 再試験は行わない.</p> <p>再試験の成績が該当する試験の成績を上回った場合には, 60 点を上限として再試験の成績で置き換えるものとする.</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>演習課題やレポートなどをすべて提出し, 学業成績で 60 点以上を取得すること.</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
量子力学	平成28年度	和田 憲幸	5	後期	学修単位 2	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>物質を構成している原子について学び、電子の運動が関わる物性を物理数学的方法によって表現し、シュレーディンガー方程式から分子の並進、振動、回転運動、原子周囲の電子のエネルギー状態を理解し、それらが関与する電子伝導、トンネル効果および電子遷移などへの応用についても検討する。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>すべての内容は、学習・教育目標(B)〈専門〉に、また JABEE 基準 1(2)(d)(2)a) 対応する。</p> <p>第1週 量子力学の基本原理解、自由電子の運動</p> <p>第2, 3週 井戸型ポテンシャルと並進運動、電子伝導への応用</p> <p>第4, 5週 トンネル効果</p>	<p>第6, 7週 調和振動</p> <p>第8週 中間試験</p> <p>第9週 回転運動</p> <p>第10~13週 水素原子とイオン化エネルギー</p> <p>第14, 15週 多電子原子と電子遷移と光の吸収と放射</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 古典力学と量子力学を比較し、量子が持つ波動性と粒子性を理解し、量子力学が必要な分野についての知識を習得する。</p> <p>2. 電子、原子、分子の運動についてシュレーディンガー方程式を解くことにより、エネルギーと波動関数を求め、その解が利用できることともに、それらについて説明できる。</p> <p>3. トンネル効果を理解する。</p>	<p>4. シュレーディンガー方程式を解き水素原子の電子のエネルギーを求め、これを利用して水素原子および水素類似原子の電子のエネルギーとイオン化エネルギーを算出できるとともに、説明できる。</p> <p>5. 多電子原子の電子状態を理解する。</p> <p>6. 電子遷移と光の吸収と放射について理解できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>量子(電子、原子および分子)の運動に対して基礎理論を理解し、シュレーディンガー方程式とポテンシャルから、その運動エネルギーと波動関数を導き、それらを利用して計算、推定できる専門知識を培う。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」1~6の確認を中間試験、期末試験で行う。1~6に関する重みは同じである。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項]</p> <p>数式の背景にある物理的意味を理解することが重要である。また、本教科は後に学習する基礎電子化学(専攻科)の基礎となる教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>数学の微分・積分(重積分を含む)三角関数、指数関数を理解している必要がある。本教科は物理化学 I や物理化学 II の学習が基礎となる教科である。</p>	
<p>[自己学習]</p> <p>授業で保証する学習時間と、予習・復習(中間試験、定期試験のための学習も含む)及び適時与える演習問題のレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、45時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書:「アトキンス物理化学(上)(下)」千原, 中村訳 (東京化学同人)</p> <p>参考書:「はじめて学ぶ量子化学」阿部正紀著 (培風館)</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>中間・期末の2回の試験(100点満点)の平均点を最終評価点とする。なお、中間・期末試験の再試験は行われぬ。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
材料工学実験	平成28年度	材料工学科全教員	5	前期	履修単位 4	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>材料を分析する技術は、急速に発展しており、それに対応する人材を育成ことが重要になっている。そこで、この実験では、卒業研究や卒業後においても利用すると考えられる分析・観察・測定装置について、原理を理解し、その取扱い方法と試料作製技術等を修得する。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>学習・育目標 専門, JABEE 基準 1 (2) (d) (2)a)に対応する</p> <p>(1) 分析・測定・観測技術</p> <p>第1週 安全教育</p> <p>第2～11週 クラスを班分けして、(i)～(ix) 下記のテーマについて実験を行う。</p> <p>(i)表面粗さ測定 (新人)</p> <p>(ii) ビデオマイクロスコープを用いた表面解析 (江崎)</p> <p>(iii) 蛍光 X 線分析 (兼松)</p> <p>(iv) FE-SEM を用いた表面観察実験 (小林)</p> <p>(v) ラマン分光による測定実験 (宗内)</p> <p>(vi) Mini-SEM による観測 (南部)</p> <p>(vii) 蛍光および吸収分光分析 (和田)</p>	<p>(viii) 粒度分布測定 (黒田)</p> <p>(ix) 赤外線サーモグラフィによる温度測定 (万谷)</p> <p>(x) X 線回折測定とその解析 (幸後)</p> <p>第12～15週 上記のテーマ(i)～(ix)の実験予備日</p> <p>(2) 卒業研究室における基礎的な実験技術の習得 (材料工学科全教員)</p> <p>(1)のテーマの実験以外の時間は、材料工学分野の配属された研究室の指導教官の下で、文献調査や予備実験などに基づき、取り組もうとする卒業研究テーマに関係して、実験装置の設計、測定器具の自作、組み立て、プログラミング、シミュレーション、測定などを行い、技術者としての研究開発能力を培う。</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 各実験装置の原理を理解できている。</p> <p>2. 指導教員の立会いのもと、各実験装置の操作や各実験装置に用いる試料の調整が出来る。</p>	<p>3. 卒業研究の目的、意義を明確に理解し、研究テーマに沿って具体的作業が出来る。</p> <p>4. 先行研究についての継続的学修が出来る。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>上記テーマおよび卒業研究室における基礎となる実験に関係する専門知識および代表的な実験手法を理解しており、データ整理、解析ができ、さらに、得られた結果を論理的にまとめ、報告することができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」の1, 2をテーマ(1)～(9)のレポートによって、「知識・能力」の3, 4を卒業研究テーマに関する具体的な取り組みにより100点満点で評価する。レポートの評価に50%の重みを、卒業研究テーマに関する具体的な取り組みに50%の重みを持たせ、最終評価を行う。満点の60%の得点で、目標の達成を確認する。</p>
<p>[注意事項] (1) 運動靴等を履く、(2) 実験ノートを持参すること。本教科は、後に学習する専攻科特別研究に関連する教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 本教科は、1～4年次の材料工学実験の学習と強く関連している教科である。既習の事項は、しっかりと復習しておく。</p>	
<p>[レポート等] 実験で得られた成果および課題をレポートとして、各自が所定の書式により期日までに提出する。</p>	
<p>教科書：プリント配布</p> <p>参考書：各テーマに関係する事項を含む多くの参考書が図書館にある。</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>各自に課せられたすべてのテーマのレポートおよび卒業研究テーマに関する具体的な取り組みを100点満点で評価し、それぞれに、50%と50%の重みを持たせ最終評価を行う。ただし、未提出レポートがある場合、そのテーマの評価を0点とする。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>評価の結果で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
卒業研究	平成28年度	材料工学科全教員	5	通年	学修単位 10	必

<p>[授業のねらい]</p> <p>材料に関する実験・研究を通じてこれまで学んできた学問・技術の総合应用能力, 課題設定力, 創造力, 継続的・自律的に学習できる能力, プレゼンテーション能力および報告書作成能力を培い, 解決すべき課題に対して創造性を発揮し, 解決法をデザインできる技術者を養成する.</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>全ての内容は, 学習・教育目標</p> <p>(A) 技術者としての姿勢<意欲></p> <p>(B) 基礎・専門の知識とその応用力<専門>及び<展開></p> <p>(C) コミュニケーション能力<発表>に対応する.</p> <p>また, JABEE 基準 1 (2) の (d) (2) a), b), c), d), (e), (f), (g), (h) および (i) に対応する.</p>	<p>第1週から30週にわたって, 学生自身が材料工学分野において, その製造, 加工, 応用に関する研究テーマを持ち, 各教員の指導の下に研究を行う. テーマ分野は下に示す通りである.</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 材料の構造・性質に関する分野 2. 材料のプロセスに関する分野 3. 材料の機能及び設計・利用に関する分野 <p>後期始めに研究成果の中間発表を行う.</p> <p>学年末に卒業研究論文を提出して卒業論文発表会を実施する.</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究を進める上で準備すべき事柄を認識し, 継続的に学習することができる. 2. 研究を進める上で解決すべき課題を把握し, その解決に向けて自律的に学習することができる. 3. 研究のゴールを意識し, 計画的に研究を進めることができる. 	<ol style="list-style-type: none"> 4. 研究を進める過程で自らの創意・工夫を発揮することができる. 5. 中間発表と最終発表において, 理解しやすく工夫した発表をすることができ, 的確な討論をすることができる. 6. 卒業論文を論理的に記述することができる. 7. 卒業論文の英文要旨を適切に記述することができる.
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>材料工学に関する分野で, 習得した知識・能力を超える問題に備えて継続的・自律的に学習し, 習得した知識をもとに創造性を発揮し, 限られた時間内で仕事を計画的に進め, 成果・問題点等を論理的に記述・伝達・討論することができる.</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～7の習得の度合いを, 中間発表 (10%), 最終発表 (20%), 卒業論文 (指導教員による評価 50%+副査 1名による評価 20%) により評価し, 100 点満点で 60 点以上の得点を取得した場合に目標を達成したことが確認できるように, 卒業論文およびそれぞれの発表のレベルを設定する.</p>
<p>[注意事項] 積極的活能的に取り組むこと. 専攻科の特別研究の基礎となる教科である.</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 1 学年から 4 学年までに実施した実験・実習および平行して進める 5 学年実験・実習で修得した実験操作や知識は修得しているものとして進める. 1 年次から 4 年次までの材料工学実験が基礎となる教科である.</p>	
<p>[レポート等] 理解を深めるために, 適宜演習課題を課することがある.</p>	
<p>教科書および参考書: 各指導教員に委ねる.</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>卒業研究評価表にしたがって, 中間発表 (10%), 最終発表 (20%), 卒業研究論文 (指導教員による評価 50%+副査 1 名による評価 20%) として 100 点満点で評価する. ただし, 卒業研究論文が未提出あるいは最終発表がなされない場合は 59 点以下とする.</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で 60 点以上を習得すること.</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
応用数学Ⅱ	平成28年度	島田 佑一	5	前期	履修単位 1	選

[授業のねらい] 講義は連立微分方程式、フーリエ級数の理論・応用からなる。これらの理論・原理を用いて、専門教科に表れる現象を数学的に解明することを目的とする。今まで学んできた線形代数・微分積分学を始めとする数学全般の生きた知識が要求されるので、その都度確認し復習する。

<p>[授業の内容]</p> <p>[授業の内容] この授業の内容は全て学習・教育目標(B)＜基礎＞及び Jabee 基準1の(2)(c)に対応する。</p> <p>(連立微分方程式)</p> <p>第1週. 連立微分方程式について</p> <p>第2週. 指数行列</p> <p>第3週. 定数係数連立微分方程式(1)</p> <p>第4週. 定数係数連立微分方程式(2)</p> <p>第5週. 定数係数連立微分方程式(3)</p> <p>第6週. 定数係数非同次線形微分方程式</p> <p>第7週. 二階線形常微分方程式の連立微分方程式を用いた解法</p> <p>第8週. 中間試験</p>	<p>(フーリエ級数)</p> <p>第9週. 周期関数</p> <p>第10週. フーリエ級数</p> <p>第11週. フーリエ級数の性質</p> <p>第12週. 複素フーリエ級数</p> <p>第13週. フーリエ級数展開の偏微分方程式への応用</p> <p>第14週. フーリエ変換</p> <p>第15週. フーリエ変換の性質</p>
---	---

<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>(微分方程式)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 連立微分方程式の解を求めることができる。 2. 連立微分方程式の定常解を理解し求めることができる。 3. 非線形連立微分方程式の線形化ができる。 4. 非線形連立微分方程式の線形化の解の安定性が理解できる。 	<p>(フーリエ級数)</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. 具体的な関数のフーリエ係数が計算で求められ、フーリエ級数展開できる 7. 具体的な関数の複素フーリエ級数展開ができる 8. 具体的な関数のフーリエ変換を求めることができる 9. 簡単な微分方程式をフーリエ級数展開・フーリエ変換を利用して解くことができる
--	--

<p>[この授業の達成目標]</p> <p>連立微分方程式・フーリエ級数の理論の基礎となる数学の知識(線形代数・微分積分学)を理解した上で計算ができて、専門教科等に表れる問題を含めてこの分野の様々な問題を解決することができる。</p>	<p>達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～9を網羅した問題を中間試験、定期試験で出題し、目標の達成度を評価する。達成度評価における各「知識・能力」の重みは概ね均等とするが、各試験においては、結果だけでなく途中の計算を重視する。評価結果が百点法で60点以上の場合に目標の達成とする。</p>
---	---

[注意事項] 数学の多くの知識を使うので、低学年次に学んだことの復習を同時にすること。疑問が生じたら直ちに質問すること。本教科は専攻科の代数学特論、数理解析学Ⅰ、Ⅱの基礎となる教科である。

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 線形代数・微分積分学の全ての基礎知識。低学年の数学の授業で学んだこと。本教科は数学特講Ⅰ、Ⅱや応用数学Ⅰの学習が基礎となる教科である。

[レポート等] 授業の理解を深めるため課題の出題や小テストを行う。

教科書：特に指定しない。

参考書：応用数学 高藤, 斉藤 他4名著(大日本図書), ミニマム線形代数 大橋, 加藤, 谷口共著(コロナ社), フーリエ解析 理工系の数学入門シリーズ6 大石進一著(岩波書店)

[学業成績の評価方法および評価基準] 前期中間試験, 前期末試験の2回の試験の平均点を80%, 小テスト・課題等の評価を20%として, それぞれの期間毎に評価し, これらの平均値を最終評価とする。ただし, 中間試験で60点に達していない者(無断欠席者は除く)には再試験を課し, 再試験の成績が再試験の対象となった試験の成績を上回った場合には, 60点を上限としてそれぞれの試験の成績を再試験の成績で置き換えることがある。

[単位修得要件] 学業成績で60点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
工業英語	平成28年度	兼松 秀行	5	後期	履修単位1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>工業英語では、従来の工業英語作文技法の進め方とは異なり、実際に技術者が製造業において必要とされる基礎知識をためす To-Be エンジニア検定試験にもちいられる教科書を用い、それらの単語とそれを用いた文章を徹底的に授業中に検討を進めて、理解して使えるようにすることを主眼とする。また理解度が確認できるように e-learning による演習問題を適宜行って自らの進行度をチェックする自主的な学習態度を涵養する。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>学習・教育目標(C)＜英語＞, JABEE 基準1(2)(f)に対応</p> <p>第1週 授業の概要と進め方・工業材料一般</p> <p>第2週 金属の結晶構造</p> <p>第3週 合金の構造と特徴</p> <p>第4週 熱処理</p> <p>第5週 変形</p> <p>第6週 強度特性</p> <p>第7週 金属の腐食とその防止</p> <p>第8週 機能性材料</p>	<p>第9週 熱可塑性樹脂と熱硬化性樹脂</p> <p>第10週 プラスチックの力学的性質</p> <p>第11週 プラスチックの成形法</p> <p>第12週 複合材料の種類</p> <p>第13週 複合材料の成形法と応用分野</p> <p>第14週 セラミック材料の種類</p> <p>第15週 セラミック材料の適用</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 工業材料一般の概念などの英文が理解でき、また英語で表現できる。</p> <p>2. 金属の結晶構造に関する英文を理解し表現できる</p> <p>3. 合金の構造と特徴に関する英文を理解し表現できる。</p> <p>4. 金属の熱処理に関する英文を理解し表現できる</p> <p>5. 金属の強度特性・変形に関する英文を理解し表現できる</p> <p>6. 金属の腐食とその防止に関する英文を理解し表現できる</p>	<p>7. 機能性材料に関する英文を理解し表現できる</p> <p>8. 熱可塑性樹脂と熱硬化性樹脂に関する英文を理解し表現できる</p> <p>9. プラスチックの力学的性質および成形法に関する英文を理解し表現できる</p> <p>10. 複合材料に関する英文を理解し表現できる</p> <p>11. セラミックスに関する英文を理解し表現できる</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>材料工学分野の工業英語が必要となる、科学・技術英単語、英語表現の基本を理解し、専門的な学術論文を読みこなす読解力と、実験または自らが実施した研究の概要を英語で実際にためらわずに正しく記述するための基礎を身に付ける。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～11を網羅した問題を毎時間授業前に提示し、提出されたレポートで目標の達成度を評価する。各項目の重みは概ね均等とする。その合計点が満点の60%以上を得点した場合に目標の達成とする。</p>
<p>[注意事項] 本教科は専攻科で学習する英語総合Iおよび技術英語Iの基礎となる教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 本教科はこれまでに学習した英語の基本知識が必要であり、特に英語IVでの学習が基礎となる教科である。また材料工学の一般的知識が必要となる。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習(レポート作成のための学習も含む)に必要な標準的な学習時間の総計が、45時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書：To-Be エンジニア検定企画委員会編：機械I（機械工学基礎・材料・設計製図）工学研究者 2014, 東京</p> <p>参考書：工業技術英語の基礎（高橋晴雄著）（森北出版社）その他技術英語、工業英語に関する書籍</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>ラーニングマネジメントシステム上に掲げられた演習課題を予習し、講義中に課題の解答を作成し、ループリックを用いておも実樹で評価点を算出し、これらの平均値を最終評価点とする。授業中の課題についての演習を中心に学習を進め、レポート点にて評価するため、定期試験は行わない。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>提示されたレポート課題が全て受理され、評価点が60点以上となること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
情報処理応用	平成28年度	南部 智憲	5	後期	履修単位 1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>コンピュータ技術および情報ネットワーク技術の発展により、科学・技術問題の解決にコンピュータを有効に活用できる能力が必要とされている。本講義では、検索サービスを利用して学術情報を取得する方法、コンピュータを用いて数値データを効率的に解析する方法、説得力のある論文やプレゼンテーション資料を作成する方法、ならびに材料工学の分野で一般的に用いられる画像解析、画像処理技術を演習する。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>すべての内容は、材料工学科学習・教育目標(B)〈専門〉に、また、JABEE 基準 1 (2) (d)2 に対応する。</p> <p>第1週 文献検索・特許検索 第2週 統計処理 第3週 グラフ作成、最小二乗近似 第4週 グラフ作成、工学問題の数値解析 第5週 プラットフォーム、行列計算 第6週 演習1：ワープロ、表計算による報告書作成 第7週 演習2：ワープロ、表計算総合演習 第8週 中間試験</p>	<p>第9週 画像解析ソフトの紹介および操作方法の基礎 第10週 画像処理1：画像ファイルの種類、2値化 第11週 画像解析1：面積率の計算 第12週 画像解析2：画像の合成 第13週 画像解析3：画像データの数値化 第14週 演習3：工学問題の画像処理、画像解析演習 第15週 演習4：工学問題の解析に関する総合演習</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 論理式を用いた情報データベースの論理検索ができる。 2. 表計算ソフトを用いて、科学・技術問題の数値解析ができる。 3. 実験データの解析に効果的な図・表を作成できる。 4. テキスト文章と、図・表等の画像データとを組み合わせ、原稿・資料を作成できる。</p>	<p>5. 画像ファイルを2値化し、解析できる。 6. 多焦点画像を合成し、焦点の整った画像を作成できる。 7. グラフ画像を数値化し、編集できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>必要な学術情報を確実に効率的に収集するとともに、実験等で得られたデータを解析し、それらに基づいて論文やプレゼンテーション資料を作成することができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～7を網羅した問題を中間試験、期末試験およびレポート課題で出題し、目標の達成度を評価する。各項目の重みは概ね均等とする。提示されたレポート課題の全てが受理され、中間試験および期末試験の合計点が満点の60%以上を得点した場合に目標の達成とする。</p>
<p>[注意事項] 本教科は実験実習や卒業研究と強く関連する教科である。定期試験では実技試験を行うので、コンピュータの活用方法を確実に習得していただきたい。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 本教科は情報処理Ⅰ～Ⅲでの学習が基礎となる教科である。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、学年末試験のための学習も含む）およびレポート課題の作成に必要な標準的な学習時間の総計が45時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書：プリント配布 参考書：「厳選例題 Excel で解く問題解決のための科学計算入門」吉村 忠与志 著（技術評論社）</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>中間試験および期末試験の2回の試験の平均点を100%として評価する。なお、中間・期末試験の再試験については、原則、実施しない。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>提示されたレポート課題が全て受理され、学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
設計製図Ⅴ	平成28年度	南部 智憲	5	前期	履修単位 1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>三次元 CAD システムを用いた設計製図の知識と技術を習得する。各種 3D オブジェクトのモデリングおよび材料試験装置の設計を行い、これにより材料工学設計製図の集大成とし、実社会に応用可能な製図のスキルを向上させることの両面を目指す。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>すべての内容は、材料工学科学習・教育目標(B)＜専門＞に、また JABEE 基準 1(2)(d)(2)a)に対応する。</p> <p>第1週 授業の概要説明および 3DCAD システムの環境設定</p> <p>第2週 3D-CAD ソフトの基本操作</p> <p>第3週 チュートリアルによる演習 1：3D モデリング</p> <p>第4週 チュートリアルによる演習 1：部品図のアセンブリ</p> <p>第5週 チュートリアルによる演習 1：投影図への変換</p> <p>第6週 機械製図のトレース 1：等角図からの 3D-CAD</p> <p>第7週 機械製図のトレース 2：投影図からの 3D-CAD</p> <p>第8週 中間試験</p>	<p>第9週 材料試験装置の設計 1</p> <p>第10週 材料試験装置の 3D モデリング</p> <p>第11週 材料試験装置の 3D モデリング</p> <p>第12週 材料試験装置の設計 2</p> <p>第13週 材料試験装置の 3D モデリング</p> <p>第14週 材料試験装置の 3D モデリング</p> <p>第15週 材料試験装置の 3D モデリング</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 3DCAD ソフトを運用し、データファイルの取扱いができる。</p> <p>2. 3DCAD で使用される専門用語を説明できる。</p> <p>3. 2次元投影図から 3次元モデルを構築できる。</p>	<p>4. 所定の誓約条件に基づいて機械システムの設計を行い、3次元モデルを構築できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>3DCAD システムの操作方法を習得し、誓約条件に基づいた機械システムの設計を行い、3次元モデルを構築することができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～4を網羅した問題を中間試験および学年末試験で出題し、目標の達成度を評価する。各項目の重みは概ね均等とする。提示されたレポート課題の全てが受理され、中間試験、学年末試験の合計点が満点の 60%以上を得点した場合に目標の達成とする。</p>
<p>[注意事項] 定期試験では実技試験を行うので、CAD の使用方法を確実に習得していただきたい。また、本教科は専攻科で学習する実験実習と強く関連する教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 本教科は材料工学設計製図Ⅰ～Ⅳでの学習が基礎となる教科である。また、情報処理Ⅰで習得した OS の操作方法も十分理解している必要がある。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、学年末試験のための学習も含む）およびレポート課題図面の作製に必要な標準的な学習時間の総計が 45 時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書：プリント配布</p> <p>参考書：SolidWorks による 3次元 CAD, 門脇重道・高瀬善康著, 実教出版</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>中間試験・期末試験の 2 回の試験(100 点満点)の平均点を最終評価点とする。なお、中間・期末試験の再試験については、原則、実施しない。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>提示されたレポート課題が全て受理され、学業成績で 60 点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
無機機能材料	平成28年度	幸後 健	5	前期	履修単位 1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>4年生の「無機材料」の基礎事項を基に機能材料について学ぶ。機能材料では、材料を電気・電子・磁気・光・熱・化学・エネルギー関連など各種機能別に分類して、それぞれの機能に関する様々な材料特性について、その理論的背景およびプロセッシングを系統的に理解し、各種の機能材料に関する専門知識について学ぶ。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>以下の内容は、すべて、学習・教育目標（B）＜専門＞に、また、JABEE 基準 1 (2) (d) (2) a) に対応する。</p> <p>第1週 電気関連機能材料</p> <p>第2週 半導体特性機能・材料</p> <p>第3週 半導体特性機能・材料</p> <p>第4週 イオン導電性機能材料</p> <p>第5週 磁気関連機能材料</p> <p>第6週 磁気関連機能材料</p> <p>第7週 誘電特性・材料</p> <p>第8週 中間試験</p>	<p>第9週 誘電特性・材料</p> <p>第10週 誘電特性・材料</p> <p>第11週 圧電・焦電機能材料</p> <p>第12週 光関連機能材料</p> <p>第13週 光関連機能材料</p> <p>第14週 レーザ特性・材料</p> <p>第15週 光触媒機能材料など</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 導電メカニズムが理解でき、不定比性化合物の電気伝導率の特質を理解できる。</p> <p>2. 半導体の基礎を理解し、PTC 効果、ガスセンサー機構の基礎など半導体材料の特質と応用を理解できる。</p> <p>3. イオン導電体の結晶構造の特性と各種の材料を理解できる。</p> <p>4. 磁気の発現機構、磁気履歴曲線などを理解し、材料の種類と特質を理解できる。</p> <p>6. 誘電体の構造、分類、誘電損失、誘電分散、その応用材料が理解できる。</p>	<p>7. 圧電性の原理とその材料の特性の基礎が理解できる。</p> <p>8. 焦電性の原理とその材料の特性の基礎が理解できる。</p> <p>9. 光の透過、吸収、損失の原理およびその応用材料が理解でき、光電効果、フォトクロミズムの原理およびその応用材料が理解できる。</p> <p>11. レーザの発現機構と特質および応用が理解できる。</p> <p>12. 光触媒の原理およびその応用材料が理解できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>機能材料に関する理論的背景、プロセッシングを系統的に理解し、材料の各種機能に関する専門知識を習得し、材料の機能面での応用に適用できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」の記載事項の確認を中間試験、定期試験およびレポートや小テストで出題し、目標の達成度を評価する。各項目に関する重みは同じである。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項] 無機材料での教科書を用いる。また、さまざまなデータを示して講義を行うので必ずノートを取る。複合材料と関連する事項については、複合材料の教科書を参考にすること。また、本科目は専攻科のエコマテリアルなどの教科と強く関連する。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 金属材料、セラミックス材料および有機材料などの材料を機能別に分類し、その特性および応用について系統的に講義が進められるので、これらの材料の基礎知識は十分理解しておくこと。また、本科目の履修には3年次の無機化学や4年次の無機材料の学習が基礎となる。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験、レポートのための学習も含む）に必要な標準的な学習時間の総計が、45時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書：「基礎固体化学」（無機材料を中心とした）村石治人（三共出版）</p> <p>参考書：「機能材料の基礎知識」神藤欣一著（産業図書）、「機能材料キーワード」大森・須田・藤木編著（日刊工業新聞社）</p> <p>「機能材料入門」上巻・下巻 本間基文、北田正弘編（アグネ）</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 中間・期末試験結果の平均点を80%、レポートを20%で評価する。なお、中間試験及び期末試験については、原則、再試験を行わない。</p>	
<p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
無機合成化学	平成28年度	幸後 健	5	後期	履修単位 1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>3年生の「無機化学」や4年生の「無機材料」、及び5年次開講科目を基に無機材料の合成法について学ぶ。無機合成では一般的な材料の合成法、及び各種機能性など用途別に適した合成法について学ぶ。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>以下の内容は、すべて、学習・教育目標 (B) <専門>に、また、JABEE 基準1(2)(d)(2)a)に対応する。</p> <p>第 1 週 材料の合成プロセス 第 2 週 固相反応法について 第 3 週 液相反応法について 第 4 週 液相反応法について 第 5 週 気相反応法について 第 6 週 気相反応法について 第 7 週 代表的な無機材料の合成法について 第 8 週 中間試験</p>	<p>第 9 週 無機材料の成型とその加工について 第 10 週 無機材料の薄膜形成法について 第 11 週 焼成プロセスと粒子形状について 第 12 週 特殊条件下での合成について 第 13 週 単結晶材料の合成について 第 14 週 単結晶材料の合成について 第 15 週 総復習</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 合成法の一般的な種類とその性質を理解できる。 2. 固相反応法について、その種類と性質を説明できる。 3. 液相反応法について、その種類と性質を説明できる。 4. 気相反応法について、その種類と性質を説明できる。</p>	<p>5. 無機材料製品の成型と加工について説明できる 6. 無機材料の結晶成長について、焼成などのプロセスでの成長メカニズム及び、緻密体や多孔体焼成物について説明できる 7. 特殊条件下での薄膜形成法について説明できる。 8. 単結晶材料の合成について、合成法と用途を理解できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>無機材料合成に関する知識について、理論的背景及びプロセスを系統的に理解した上で、無機材料合成法の各種機能性に関する専門知識を習得し、目的に応じた合成を適用できる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」の記載事項の確認を中間試験、定期試験で出題し、目標の達成度を評価する。各項目に関する重みは同じである。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項] 無機材料での教科書を用いる。また、さまざまなデータを示して講義を行うので必ずノートを取る。複合材料と関連する事項については、複合材料の教科書を参考にすること。また、本科目は専攻科のエコマテリアルなどの教科と強く関連する。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 無機材料の特性を元に合成手法に関する講義が進められるので、これらの各種無機材料の基礎知識を十分に修得しておくこと。また、本科目の履修には3年次の無機化学や4年次の無機材料の学習が基礎となる。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験）に必要な標準的な学習時間の総計が、45時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書：「基礎固体化学」（無機材料を中心とした）村石治人（三共出版） 参考書：「機能材料の基礎知識」神藤欣一著（産業図書）、「機能材料キーワード」大森・須田・藤木編著（日刊工業新聞社） 「機能材料入門」上巻・下巻 本間基文，北田正弘編（アグネ）</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 中間・期末試験結果の平均点を100%で評価する。なお、中間試験評価及び期末試験での再試験は原則、実施しない。</p>	
<p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
有機機能材料	平成28年度	宗内 篤夫	5	前期	履修単位 1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>有機材料である高分子の分子構造を理解して、その構造と分子構造の関連する特性を物理化学な観点から理解する。有機化学の基礎知識をベースにして汎用性および高機能有機高分子材料についての基礎知識を習得することを目的とする。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>第1週～第15週までの内容はすべて、学習・教育目標 (B) <専門>, JABEE 基準 1 (2) (d) (2) a) に相当する。</p> <p>第1週 講義の進め方説明, 高分子の物理化学</p> <p>第2～3週 高分子の大きさとその測定法</p> <p>第4～5週 高分子構造とその動力学</p> <p>第6～7週 コロイド構造とミセルの物理化学</p> <p>第8週 中間試験</p>	<p>第9週 有機高分子材料と他の材料の物質特性比較</p> <p>第10～12週 汎用および高性能有機高分子材料</p> <p>第13～15週 機能性有機高分子材料</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 高分子の大きさとその測定法が理解できる。</p> <p>2. 高分子構造とその動力学が把握できる。</p> <p>3. コロイド構造とミセルの物理化学が理解できる。</p>	<p>4. 汎用および高性能有機高分子材料について理解できる。</p> <p>5. 機能性有機高分子材料について理解できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>高分子の材料特性について理解して、高性能および機能性有機高分子について理解して、将来的に機器の部品として応用ができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」1～6を網羅した問題を定期試験および演習・レポートで、目標の達成度を評価する。</p> <p>レポートの提出がないときは、20%の減点を行う。</p> <p>評価における1～6までの各項目の重みは概ね均等とする。</p> <p>評価結果が百点法の60点以上の場合に目標達成とする。</p>
<p>[注意事項] 有機高分子機能材料を学び、将来的に各種の用途に応用できるように理解を深める。</p> <p>有機材料工学の基礎となる教科である。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
(つづき) 有機機能材料	平成 28 年度	宗内 篤夫	5	前期	学修単位 1	選

[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 高校程度の化学知識が必要。有機化学、有機材料の学習が基礎になる教科である。

[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験、小テストのための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、45 時間に相当する学習内容である。

教科書： 「アトキンス物理化学下」 千原，中村訳（東京化学同人）

参考書： 「アトキンス物理化学上」 千原，中村訳（東京化学同人） 「E-コンシヤス 高分子材料」 柴田充弘，山口 達明 三共
出版他の参考書は，講義の中で紹介。

[学業成績の評価方法および評価基準] 中間・期末の試験結果をそれぞれの期間毎に評価し，これらの平均値を最終評価とする。この科目については，原則，再試験を行わない。

[単位修得要件] 上記評価基準に従った学業成績で 60 点以上を取得すること。

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
電気化学	平成28年度	兼松 秀行	5	前期	履修単位 1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>各種材料と電気化学との関わり合いを、様々な電気化学の諸問題を取り上げて学び、電気化学がいかに材料とりわけ金属材料の様々な諸現象や開発に役立つものかを理解する。</p>	
<p>[授業の内容] 第1週～15週までの内容はすべて、学習・教育目標 (B) <専門>JABEE 基準 1(2) (d) (2)a) に相当する。</p> <p>第1週 電気化学の概要</p> <p>第2週 電解質溶液の性質</p> <p>第3週 電池の起電力と電極電位</p> <p>第4週 電極と電解液界面の構造</p> <p>第5週 電極反応の速度</p> <p>第6週 光電気化学</p> <p>第7週 電解合成の基礎</p> <p>第8週 中間試験</p>	<p>第9週 一次電池と二次電池</p> <p>第10週 燃料電池</p> <p>第11週 電気化学キャパシター</p> <p>第12週 光触媒と湿式太陽電池</p> <p>第13週 化学センサー</p> <p>第14週 腐食防食と表面処理</p> <p>第15週 電気化学と環境</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 電位、電流と酸化還元反応の関係が説明できる。</p> <p>2. 酸化還元反応と電解質溶液の関係が説明できる。</p> <p>3. 電極の界面構造が説明できる。</p> <p>4. 光と電気化学反応の関係が説明できる。</p> <p>5. 電解合成の基礎的な事柄が説明できる。</p> <p>6. 電池の分類とその基本的な概念・構成が説明できる。</p>	<p>7. 燃料電池について基礎的な事柄が説明できる。</p> <p>8. 電気化学キャパシターの基礎的な事柄が説明できる。</p> <p>9. 光触媒、湿式太陽電池、化学センサーを説明できる。</p> <p>10. 腐食防食と表面処理における電気化学の関わりについて説明できる。</p> <p>11. 電気化学と環境の関わりについて説明できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>1～11の具体的項目に沿って、腐食についての電気化学的アプローチを理解するとともに、それらに関する種々の計算ができること。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」1～11を網羅した問題を定期試験および演習・課題レポートで出題し、目標の達成度を評価する。評価における1～11までの各項目の重みは概ね均等とする。評価結果が百点法の60点以上の場合に目標達成とする。</p>
<p>[注意事項] 演習問題を多く行うこと。本教科は専攻科応用物質工学専攻における基礎量子化学に深く関係する科目である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 技術・理系系大学1,2年程度および高専3,4年の物理、化学および数学を前提とする。本教科は物理化学I, IIの学習が基礎となる教科である。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習(中間試験, 定期試験, 小テストのための学習も含む) 及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、45時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書: 「基礎からわかる電気化学(第二版)」泉生一郎ら(森北出版)</p> <p>参考書: 「エッセンシャル電気化学」玉虫怜太, 高橋勝緒(東京化学同人)。新世代工学シリーズ</p> <p>「電気化学」小久見 善八 編著(オーム社)</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>中間・期末試験結果の平均点を80%, レポートや小テストを20%で評価する。レポート, 小テストはあらかじめLMS(blackboard)上に掲示し, 自宅学習により理解を進める。なお, 中間・期末試験の再試験については, 原則実施しない。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
材料機器分析	平成28年度	宗内 篤夫	5	前期	履修単位 1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>材料の特性分析する際に使用する分析機器についての基礎知識を習得することを目的とする。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>第1週～第15週までの内容はすべて、学習・教育目標 (B) <専門>, JABEE 基準 1(2)d) (2)a) に相当する。</p> <p>第1週 講義の進め方につき説明, 機器分析分類と概論</p> <p>第2,3週 紫外可視吸光分析</p> <p>第4,5週 蛍光分析</p> <p>第6週 原子吸光分析</p> <p>第7,8週 赤外・ラマン吸光分析</p>	<p>第9週 中間試験</p> <p>第10～13週 核磁気共鳴分析</p> <p>第14,15週 表面分析 X線電子分光法, オージェ電子分光法</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 材料分析を実施するための機器分析に関して, 機器の原理やどのような情報が得られるか 理解できる。</p> <p>2. 以下の電磁波と材料の化学種との相互作用を利用した分析原理, 得られる結果, 解釈が理解できる。</p> <p>1) 紫外可視吸光分析</p> <p>2) 蛍光および原子吸光分析</p> <p>3) 赤外・ラマン分析</p> <p>4) 核磁気共鳴 分析</p>	<p>3. 対象材料に電子線や粒子線を照射して, その結果生じる電磁波を分析する表面分析法が理解できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>材料分析のために機器分析の基礎理論を理解し, 電磁波と材料の化学種の相互作用, 物質のキャラクタリゼーション, 電子線, 粒子線を用いた表面分析法に関する専門知識を得ることができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」1～4を網羅した問題を定期試験および演習・課題レポートで出題し, 目標の達成度を評価する。評価における1～7までの各項目の重みは概ね均等とする。評価結果が100点法の60点以上の場合に目標達成とする。</p>
<p>[注意事項] 機器分析の原理を学習することで適用の範囲, 限界を理解する。センサー工学の基礎となる教科である。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
材料機器分析（つづき）	平成 28 年度	宗内篤夫	5	前期	学修単位 1	選

<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 簡単な微分・積分，分子結合論の基礎知識が必要。未習得の場合は，適宜講義の中で補足する。無機材料が基礎となる教科である。</p>
<p>[自己学習] 授業で保証する学習時間と，予習・復習（中間試験，定期試験，小テストのための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が，45 時間に相当する学習内容である。</p>
<p>教科書：化学新シリーズ 「機器分析入門」 赤岩 英夫 編（裳華房） 参考書：より専門的な参考書は，講義の中で紹介する。</p>
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 中間・期末の試験結果をそれぞれ期間毎の評価とし，これらの平均値を最終評価とする。 この授業では、原則，再試験は行わない。 [単位修得要件] 上記評価基準に従った学業成績で 60 点以上を取得すること。</p>

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
半導体工学	平成28年度	小林達正	5	前期	履修単位1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>半導体は産業の米とも称され、あらゆる産業に必要なものである。半導体デバイスやセンサの基となる半導体材料に関し、種類や物性、ならびにそれらの製造工程等を概念的に把握して、新素材の開発等に伴い発生する問題を自力で解決する能力を身につけることをめざす。</p>	
<p>[授業の内容] 全ての内容は、学習・教育目標 (B) (専門) およびJABEE 基準1(2)(d)(2)a)に対応する。</p> <p>第1週 結半導体の晶結晶構造、原子間の結合力、真空中の電子</p> <p>第2週 固体中の電子</p> <p>第3週 電気伝導と伝導体の種類</p> <p>第4週 Si の結晶構造と電気伝導</p> <p>第5週 不純物を含むSi の電気伝導</p> <p>第6週 キャリヤの運動</p> <p>第7週 半導体のエネルギー帯図およびエネルギー帯図から見た電気伝導</p> <p>第8週 中間試験</p>	<p>第9週 半導体中のキャリア濃度</p> <p>第10週 pn 接合の構造およびエネルギー帯図</p> <p>第11, 12週 pn 接合ダイオード</p> <p>第13週 バイポーラトランジスタ</p> <p>第14週 集積回路</p> <p>第15週 プロセス技術</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> 真空中、固体中の電子の基本的な性質を説明できる。 導体、半導体 (真性半導体および不純物半導体) および絶縁体のエネルギー帯構造を説明できる。 電界や磁界が印可されたときのキャリアの運動について説明できる。 電気伝導のメカニズムについてエネルギー帯図により説明できる。 	<ol style="list-style-type: none"> 半導体のキャリア濃度について説明できる。 pn 接合の構造およびpn 接合ダイオードの電気的特性について説明できる。 バイポーラトランジスタ・集積回路の基本的な構造および電気的特性について説明できる。 半導体デバイスのプロセス技術について説明できる。
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>真空中および個体中での電子の振る舞いを理解し、半導体材料の物性とそのデバイスへの応用の基本的考え方や半導体デバイスの原理と動作を理解するとともに、集積回路のプロセス技術を理解している。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～8を網羅した問題を1回の中間試験および1回の定期試験で出題し、目標の達成度を評価する。達成度評価における各「知識・能力」の重みはおおむね均等とする。評価結果が百点満点で60点以上の場合に目標の達成とする。</p>
<p>[注意事項] 当科目は、後に応用物質工学 (専攻科) で学習する組織制御学、相変換工学、センサ工学の基礎となる教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 半導体の性質は主に物理学的、物理化学的に記述されるので、運動方程式や反応速度論ならびに相平衡を十分に理解していること。本教科は、基礎材料学、無機材料、材料組織学、結晶解析学および基礎である数学、物理の修得が必要である。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する学習時間と予習・復習 (中間試験、定期試験のための学習も含む) に必要な表意順的な学習時間の総計が、45時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書: 「半導体工学」渡辺 英夫 (コロナ社)</p> <p>参考書: 金属酸化物のノンストイキオメトリと電気伝導 斎藤安俊・斎藤一弥編訳 (内田老鶴圃), 『結晶と電子』河村 力 著 (内田老鶴圃) 等多数ある。</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 中間と期末との2回の試験の平均点で評価する。ただし、中間試験を受験して60点に達していない者で30点以上の者には再試験を課すこともある。その場合、再試験の成績が該当する試験の成績を上回った場合には、60点を上限として再試験の成績で置き換えるものとする。なお、中間試験を無断欠席した者については、再試験を行わない。また、期末試験については、再試験を行わない。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
塑性加工学	平成28年度	万谷 義和	5	前期	履修単位 1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>塑性加工は現代社会を支える基盤技術であり、金属製品の生産、開発に携わる材料技術者として理解しておくべき重要な学問である。曲げ、鍛造、圧延などの塑性加工技術を基礎から解説し、それぞれの加工法の特徴、技術ポイントなどを理解したうえで、演習を通じて塑性加工に関する問題を自力で解決できるようにするのが目的である。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>第1週～第15週の内容は、全て材料工学科教育目標(B)〈専門〉、JABEE 基準 1(2)(d)(2)a)に対応する。</p> <p>第1週 塑性加工とは</p> <p>第2週 金属材料の塑性変形—その1—降伏応力</p> <p>第3週 金属材料の塑性変形—その2—変形抵抗</p> <p>第4週 曲げ加工—その1—板材の曲げ変形</p> <p>第5週 曲げ加工—その2—曲げ変形理論</p> <p>第6週 鍛造加工—その1—鍛造方式と鍛造作業</p> <p>第7週 鍛造加工—その2—鍛造の理論</p>	<p>第8週 中間試験</p> <p>第9週 圧延加工—その1—圧延加工の基礎</p> <p>第10週 圧延加工—その2—板、形材、管の圧延</p> <p>第11週 引抜き加工</p> <p>第12週 押出し加工</p> <p>第13週 せん断加工</p> <p>第14週 板の成形加工</p> <p>第15週 板の成形性試験</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 塑性加工に関する専門用語が理解できる。</p> <p>2. 応力とひずみの関係が理解できる。</p> <p>3. 塑性加工に関する種々のパラメータ（物理量）などを計算することができる。</p>	<p>4. 塑性加工法の種類、特徴などを説明できる。</p> <p>5. 塑性加工の工程などの説明ができる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>塑性加工に関する基礎的概念および専門用語を理解し、塑性加工に関する種々のパラメータ（物理量）を計算するための専門知識を習得し、加工製品に生じる変形などを予測することができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」1～5の確認を中間試験、期末試験で行う。1～5の重みはおおむね同じである。合計点の60%の得点で、目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項]</p> <p>規定の単位制に基づき、自己学習を前提として授業を進めるので、日頃から予習・復習などの自己学習に励むこと。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>ベクトル・モーメントの概念、三角関数、微分、積分など。また、本教科は材料強度学、材料力学の学習が基礎となる科目である。</p>	
<p>[自己学習]</p> <p>授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験のための学習も含む）に必要な標準的な学習時間の総計が、45時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書：「基礎からわかる塑性加工（改訂版）」 長田修二、柳本 潤共著（コロナ社）</p> <p>参考書：「塑性加工入門」日本塑性加工学会編（コロナ社）、「塑性加工」 鈴木 弘編（裳華堂）など</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>中間試験、期末試験の2回の試験の平均点を100%として評価する。原則、再テストは行わない。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
鑄造工学	平成28年度	万谷 義和	5	後期	履修単位 1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>鑄造工学の基礎的な概念と模型の製作から鑄型の造型および溶融金属鑄造までの加工プロセスを理解し、各種鑄造法の特徴と鑄造品の設計について学習する。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>第1週～第15週までの内容はすべて、学習・教育目標(B)＜専門＞（JABEE 基準1(2)(d)(2)a)）に相当する。</p> <p>第1週 鑄造加工法の原理と特徴</p> <p>第2週 溶融金属の凝固組織と凝固欠陥</p> <p>第3週 模型の種類と砂型鑄造法</p> <p>第4週 砂型の性質と鑄物砂</p> <p>第5週 生砂型鑄造法とその造型プロセス</p> <p>第6週 特殊な砂型鑄造法の造型プロセス</p>	<p>第7週 金型鑄造法と低圧鑄造法</p> <p>第8週 中間試験</p> <p>第9週 金属溶解炉の選択とその特徴</p> <p>第10週 金属溶解における溶解材料の配合計算</p> <p>第11週 金属溶解における溶解材料の配合計算</p> <p>第12週 鑄造方案の立案</p> <p>第13週 溶融金属の凝固制御と押湯</p> <p>第14週 鑄造品設計のポイント</p> <p>第15週 その他の特殊な鑄造加工法</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 鑄造加工法の発展経緯と現状について理解している。 2. 金属の凝固組織や凝固欠陥について説明できる。 3. 鑄造加工法の概要を説明できる。 4. 砂型鑄造法の種類とその造型プロセスを説明できる。 5. 主要な金型および特殊鑄造法の概要について説明できる。 	<ol style="list-style-type: none"> 6. 金属溶解炉の選択と地金材料の配合計算ができる。 7. 鑄造法案について理解している。 8. 鑄造品設計の特徴と手順について説明できる。 9. 連続鑄造法や半溶融加工法などその他の特殊な鑄造加工法の名称とそのプロセスの概要が説明できる。
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>鑄造加工法に関する基礎理論を理解し、凝固組織、凝固欠陥に関する専門知識、および鑄型・砂型・金型およびそれらを用いた鑄造法に必要な専門知識を習得し、溶解炉の選択ができ、地金材料の配合計算ができ、鑄造品の形状設計、押湯の配置、半溶融加工など特殊鑄造法の説明ができる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」1～9を網羅した問題を定期試験で出題し、目標の達成度を評価する。評価における1～12までの各項目の重みは概ね均等とする。評価結果が百点法の60点以上の場合に目標達成とする。</p>
<p>[注意事項]</p> <p>規定の単位制に基づき、自己学習を前提として授業を進めるので、日頃から予習・復習などの自己学習に励むこと。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>本教科は鉄鋼材料および非鉄金属材料の学習が基礎となる科目である。</p>	
<p>[自己学習]</p> <p>授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験、小テストのための学習も含む）に必要な標準的な学習時間の総計が、45時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書：「溶融加工学」大中逸雄，荒木孝雄 共著（コロナ社）</p> <p>参考書：「鑄物の現場技術」千々岩健児編著（日刊工業新聞社），「溶融加工」田村 博著（森北出版）</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>中間試験，期末試験の2回の試験の平均点を100%として評価する。原則，再テストは行なわない。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
材料環境科学	平成28年度	宗内 篤夫	5	後期	履修単位 1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>環境と化学材料の関連および今後の進むべき科学環境の方向性に関する基礎知識を習得することを目的とする。 地球環境の現状、今後の展開を理解することを目標に講義および文献調査を行う。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>第1週～第15週までの内容はすべて、学習・教育目標 (B) <専門>, JABEE 基準 1 (2) (d) (2) a) に相当する。</p> <p>第1週 講義の進め方説明、地球環境問題</p> <p>第2～3週 地球環境 生物多様性問題と人口問題</p> <p>第4～5週 オゾン層の破壊問題と将来の課題</p> <p>第6～8週 地球温暖化の今後の課題と取り組み</p>	<p>第9週 中間試験</p> <p>第10～11週 酸性雨の現状と今後の取り組み</p> <p>第12～13週 地球環境とエネルギー</p> <p>第14～15週 地球汚染物質の現状と課題</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. 人口問題と地球環境と生物多様性の問題点が理解できる。</p> <p>2. オゾン層破壊およびその将来が理解できる。</p> <p>3. 地球温暖化の現状と今後の課題が理解できる。</p>	<p>4. 地球環境とエネルギーの関連が把握できる。</p> <p>5. 地球汚染物質について理解できる。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>各種地球を取り巻く環境問題について理解し、将来的に環境にたいして、どのように行動すべきか理解する。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>「知識・能力」1～5を網羅した問題を定期試験および演習・環境課題のレポートで、目標の達成度を評価する。 レポートの提出がないときは、20%の減点を行う。 評価における1～5までの各項目の重みは概ね均等とする。 評価結果が百点法の60点以上の場合に目標達成とする。</p>
<p>[注意事項] 地球環境の現状を学び、将来的にどのように進展するかまた、どのように行動すべきか理解を深める。 環境保全工学の基礎となる教科である。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲] 高校程度の化学知識が必要。環境科学論 が基礎となる教科である。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する学習時間と、予習・復習（中間試験、定期試験、小テストのための学習も含む）及びレポート作成に必要な標準的な学習時間の総計が、45時間に相当する学習内容である。</p>	
<p>教科書： 「地球環境の教科書 10講」 左巻健男, 平山明彦, 九里徳泰 編集 東京書籍</p> <p>参考書： グリーン・ケミストリー ゼロ・エミッションの化学をめざして吉村 忠与志 他環境関連の参考書は、講義の中で紹介。</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準] 中間・期末の試験結果をそれぞれの期間毎に評価し、これらの平均値を最終評価とする。但し、レポートの提出がないときは、20%の減点を行う。本科目については、原則、再試験を行わない。</p> <p>[単位修得要件] 上記評価基準に従った学業成績で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
基礎メカトロニクス	平成28年度	白井達也, 打田正樹	5	前期	学修単位2	選

<p>[授業の目標]</p> <p>メカニズムを自動動作するメカトロニクス技術の基礎を幅広く身に付けることで、実際にロボット技術 (RT: Robot Technology) を活用した問題解決能力を備えたエンジニアとして活躍するためのセンスと技術を身に付けることを目指す。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>すべての内容は、学習・教育目標(B)<専門>および JABEE 基準 1(2)(d)(2)a に対応する。</p> <p>第1週 SI 単位系 (7つの基本量, 組合せ単位その他)</p> <p>第2週 センサの構造と原理 (産業用)</p> <p>第3週 センサの構造と原理 (ロボットに必須のセンサ)</p> <p>第4週 センサの構造と原理 (次世代ロボット向け)</p> <p>第5週 コントローラとのインタフェース</p> <p>第6週 アクチュエータの構造と原理 (電動アクチュエータ)</p>	<p>第7週 アクチュエータの構造と原理 (空気圧アクチュエータ)</p> <p>第8週 中間試験</p> <p>第9週 アクチュエータの制御 (電動アクチュエータ)</p> <p>第10週 アクチュエータの選定 (DCモータと減速器)</p> <p>第11週 アクチュエータの利用 (移動機構)</p> <p>第12週 アクチュエータの利用 (アーム機構など)</p> <p>第13週 スイッチと非常停止回路</p> <p>第14週 産業用ロボットの種類と用途, 構造</p> <p>第15週 産業用ロボットの使い方 (実習)</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <p>1. SI 単位系における7つの基本量の定義を理解している。</p> <p>2. ロボット用のさまざまなセンサの構造と原理を理解している。</p> <p>3. センサ等とコントローラ間のインタフェースに関して基礎的な概念を理解し、実際の規格名と特徴を知っている。</p> <p>4. 電動式のアクチュエータおよび空気圧式アクチュエータの構造と原理, それぞれの特徴について理解している。</p>	<p>5. DCモータを手動操作スイッチ, リレー, Hブリッジ回路で制御するための回路構成を理解している。</p> <p>6. 要求される機械的な性能を満たすアクチュエータと減速器を選定する計算方法を理解している。</p> <p>7. 移動ロボットの移動機構の種類と特徴, アームなどへの動力伝達機構の種類と特徴を理解している。</p> <p>8. 産業用ロボットの種類と用途, その構造および実際の使い方を理解している。</p>
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>身の回りに溢れるメカトロニクス製品を構成する実際のセンサやアクチュエータの種類を網羅的に知り、実際にPLCやマイコンボードで制御して簡単なメカニズムを自ら製作して制御するための実践的な知識を習得する。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～9を網羅した問題を中間試験および定期試験, および課題レポートを提出して目標の達成度を評価する。1～9に関する重みは同じである。合計点の60%の得点で, 目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項]</p> <p>RTに関する広範囲な内容を網羅的に教授, 疑問点は自主的に調べる積極性を要求するため, RTを工学系教養として身に付けて活用したいという強い動機を持つことが望まれる。本教科は後に学習する実践メカトロニクス (専攻科) の関連教科である。</p> <p><機械工学科学生は, 既に4年次までに修得した内容に含まれる内容であるために, 履修をしても単位を与えない。></p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>メカトロニクスに関する基礎的かつ実践的な知識を教授する。力学や電気回路など, 4年次までに習った共通基礎科目の広い知識を持つことが望ましい。併せて「機械要素」, 「電気電子要素」, 「基礎組込みシステム」を受講することが望ましい。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する時間, 中間試験, 定期試験の準備を含む予習復習時間, レポート作成に必要な標準的な時間の合計が, 45時間に相当する内容となっている。</p>	
<p>[教科書] : eラーニング教材 (スライドその他)</p> <p>[参考書] : 「メカトロニクス入門」 (舟橋宏明, 岩附信行: 実教出版) など</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>前期中間, 前期末試験の2回の試験の平均点を全体評価の80%とする。中間試験において60点に達していない場合には, それを補うための補講に参加し, 再試験により該当する試験の成績を上回った場合には60点を上限として評価する。残りの20%については提出されたレポート課題により評価する。</p>	
<p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績の評価で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
基礎組み込みシステム	平成28年度	伊藤 明	5	前期	学修単位 2	選

<p>[授業の目標]</p> <p>組み込みシステムを製作して活用できるための基礎知識，特にハードウェア寄りの知識を中心に学ぶ。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>すべての内容は，学習・教育目標(B)<専門>および JABEE 基準 1(2)(d)(2)a に対応する。</p> <p>第1週 組み込みシステムとは（種類と利用例）</p> <p>第2週 計算機の構成（CPU，メモリ，クロック，電源）</p> <p>第3週 マイコン（Arduino）の機能（PIO，AD変換，PWM，通信）とプログラミング方法</p> <p>第4週 センサ、アクチュエータとの接続（信号インターフェース，駆動回路，アイソレーション）</p> <p>第5週 アナログ信号とデジタル信号（マージン，量子化誤差，誤り訂正）</p>	<p>第6週 n進法、組み合わせ回路</p> <p>第7週 順序回路（カウンタ，分周器）</p> <p>第8週 A/D変換（サンプリング周波数，基準電圧，精度）、D/A変換</p> <p>第9週 一定時間処理（タイマー割り込み）</p> <p>第10週 ノイズ対策（パスコン，ノイズフィルタ），スイッチ入力（チャタリング，プルアップ，プルダウン）</p> <p>第11週 デジタルフィルタ（平滑化処理）</p> <p>第12週 LEDの点灯，ピエゾブザー制御</p> <p>第13週 液晶ディスプレイへの文字表示</p> <p>第14週 光センサ，温度センサによる計測</p> <p>第15週 モータ制御（ステッピングモータ，サーボモータ，DCモータ）</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 組み込みシステムのハードウェア構成について理解できる。 2. 組み込みマイコンを用いたセンサ計測値の入力方法について理解している。 3. 組み込みマイコンを用いたパラレルデジタル入出力(PIO)について理解している。 4. 組み込みマイコンを用いたモータ制御の基礎について理解している。 5. 組み込みマイコンへのプログラミングについて理解している。 	
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>論理回路素子を用いたデジタル回路の設計ノウハウの基礎を学ぶ。クロック，パスコン，プルアップ/ダウンなど実際の回路を製作する上で必要な知識についても説明する。さらにプログラミングと組み込みシステム構築に必要な情報工学の基礎知識を学ぶ。マイコン周辺回路とソフトウェア製作ができる実践的な知識を身に付ける。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識・能力」1～8を網羅した問題を中間試験および定期試験，および課題レポートとして Arduino マイコンでのプログラミング課題を出題し，目標の達成度を評価する。プログラミングの習熟度の確認については，口頭試問を行う。合計点の60%の得点で，目標の達成を確認できるレベルの試験を課す。</p>
<p>[注意事項]</p> <p>マイコンを用いた電子制御の基礎について理解して欲しい。プログラミングの自習をするためにパソコンが必要だが，一般的な機種で良い。電子情報工学科学生は，既に4年次までに修得した内容に含まれる内容であるために，履修をしても単位を与えない。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>情報処理 I，情報処理 II と関連が深いのでよく理解しておくこと。電気回路の基礎を予め習得していること。</p>	
<p>[自己学習] 授業で保証する時間，中間試験，定期試験の準備を含む予習復習時間，プログラミングとレポート作成に必要な標準的な時間の合計が，45時間に相当する内容となっている。</p>	
<p>[教科書]：基本的にはプリントおよび Moodle 上の自作教材を中心に講義を行うが，随時『Arduino をはじめよう 第3版 (Make:PROJECTS)』(Massimo Banzi, Michael Shiloh 著，船田 巧 訳，オライリージャパン)を使用予定。</p> <p>[教材]：Arduino をはじめようキット (スイッチサイエンス)と上記教科書を用いてプログラミング自習する。</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>前期中間，前期末の2回の試験を60%，レポートを20%，プログラムに関する口頭試問20%として評価する。再試験はしない。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>学業成績の評価で60点以上を取得すること。</p>	

授業科目名	開講年度	担当教員名	学年	開講期	単位数	必・選
インターンシップ	平成28年度	全学科全教員	4・5	通年	履修単位1	選

<p>[授業のねらい]</p> <p>社会との密接な接触を通じて、技術者として必要な資質と実践的技術感覚を体得する。</p>	
<p>[授業の内容]</p> <p>内容は、学習・教育目標(B)＜展開＞と JABEE 基準 1(d) (2) d) に対応する。</p> <p>次のインターンシップ機関(以下、実習機関)、内容および期間で実務上の問題点と課題を体験し、日報、報告書、発表資料を作成し、発表を行う。</p> <p>【実習機関】学生の指導が担当可能な企業または公共団体の機関で専攻科分科会の推薦により校長が選定して委属した機関。ただし、専攻科2年次の就職内定者については、内定先企業等への実習とする。</p>	<p>【内容】第4学年および第5学年学生が従事できる実務のうち、インターンシップの目的にふさわしい業務</p> <p>【期間】1週間から3週間(実働5日以上)</p> <p>【日報】毎日、日報を作成すること。</p> <p>【課題】インターンシップ終了後に、報告書を作成し提出すること。</p> <p>【発表】夏季休暇後にインターンシップ発表会を開催するので、発表資料を作成し、発表準備を行うこと</p>
<p>[この授業で習得する「知識・能力」]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 技術者として必要な資質が分かり、それらを体得できる。 2. 実践的技術感覚が分かり、それらを体得できる。 3. 体得したことを日報にまとめることができる。 	<ol style="list-style-type: none"> 4. 体得したことを報告書にまとめることができる。 5. 体得したことを発表資料にすることができる。 6. 体得したことを発表し、質疑応答することができる。
<p>[この授業の達成目標]</p> <p>社会との密接な接触を通じて、技術者として必要な資質と実践的技術感覚を体得し、それらを日報や報告書にまとめ、それらをもとに、発表資料を作成し、それを伝えられる。</p>	<p>[達成目標の評価方法と基準]</p> <p>上記の「知識能力」1～6の習得具合を勤務状況、勤務態度、日報、報告書および発表の項目を総合して評価する。評価に対する「知識・能力」の各項目の重みは同じである。</p>
<p>[注意事項]</p> <p>インターンシップの内容は、第4学年および第5学年の学生が従事できる実務のうち、インターンシップの目的にふさわしい業務であること。第5学年の就職内定者については、内定先企業等への実習であること。実習機関の規則を厳守すること。評定書を最終日に受け取ったら、担任に提出すること。インターンシップの手引き、筆記用具、メモ帳(手帳)、日報、実習先から指定されている物、評定書を持参すること。</p>	
<p>[あらかじめ要求される基礎知識の範囲]</p> <p>心得(時間の厳守(10分前集合)、挨拶、お礼など)</p>	
<p>[レポート等]</p> <p>日報は、毎日、作成し、報告書も作成し、実習指導責任者の検印を受けて、インターンシップ終了後に、担任に提出すること。発表会用に発表資料および発表の準備をすること。</p>	
<p>教科書：特になし。</p> <p>参考書：インターンシップの手引き</p>	
<p>[学業成績の評価方法および評価基準]</p> <p>「インターンシップの成績評価基準」に定められた配点に従って、勤務状況、勤務態度、日報、報告書および発表により成績を評価する。</p> <p>[単位修得要件]</p> <p>総合評価で「可」以上を取得すること。</p>	